

SYŌNEN SYŌZYŌ

Sekai Bungaku Jōshū



ドン・キホーテセパンサ
プラテロとわたしヒメネス
まごころテレッダ
ほか2編



少年少女 世界文学全集

南欧・東欧編(1)

ドン・キホーテ

セルバンテス作・杉浦明平訳

プラテロとわたし

ヒメネス作・永田寛定訳

まごころ

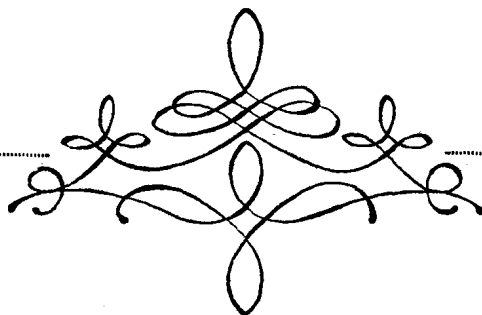
デレッタ作・矢崎源九郎訳

ほか2編



38

講談社



少年少女世界文学全集38
南欧・東欧編 第1巻

著者の了
解により
検印廃止

N. D. C. 963
講談社 昭和35
422 P 23cm

昭和35年8月20日発行

訳者代表 杉^{すぎ}浦^{うら}明^{あき}平^{へい}
発行者 野^の間^ま省^{しやう}一^{いち}
印刷者 高^{たか}橋^{はし}武^{たけ}夫^ふ

発行所 東京都文京区音羽町3ノ19 株式会社 講談社

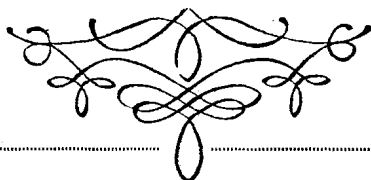
振替口座東京 3930 電話大塚 (941) 大代表 3111

印刷 大日本印刷 | 背皮 厚川株式会社
製本 和田製本 | クロス 日本クロス
本文用紙 本州製紙

定価 380円

© 杉浦明平 昭和35年

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします



PRINTED IN JAPAN



目 次

少年
少女 世界文学全集

第 38 卷
南欧·東欧編第1卷

ドン・キホーテ……

ミゲール・テ・セルバンテス作
杉浦明平訳……9

第一部

第一章 かわりものの、いなかだんな……11

第二章 ドン・キホーテ、武者修行にのりだす……16

第三章 さいしよの冒険……20

第四章 さいしよの功名……24

第五章 たて持ちサンチョ・パンサ……29

第六章 風車あいての大格闘……34

第七章 さらわれた貴婦人……37

第八章 フェオ・ブラスの霊薬……42

第九章 宿屋の冒険……46

第十章 ドン・キホーテとサンチョ・パンサは宿屋をでて二むれのひつじにでくわす……53

第十一章 になり顔の騎士……59

……59

第十二章

ドン・キホーテがマンブリーノのかぶとを手にいれて、
囚人を釈放すること……………

64

第十三章

きちがい志願……………

70

第十四章

ふしぎなであい……………

77

第十五章

ミコミコナひめ……………

83

第十六章

サンチョ・パンサが主人とろばとを発見する……………

87

第十七章

家路のとちゆうで勇士は、べつのしごとをやつてのける……………

91

第一部

第十八章

郷士どののまよいのゆめはさめない……………

103

第十九章

ドウルシネアの村……………

111

第二十章

鏡の騎士との決闘……………

120

第二十一章

国王のライオン……………

129

第二十二章

ろばのなき声合戦……………

135

第二十三章

まほうの小船……………

140

第二十四章

女かりゆうどにであうこと……………

146

第二十五章 ドウルシネアひめのまほうをとくために
三千三百回むちでたたかれること……………154

第二十六章 ドロリーダひめ……………159

第二十七章 木馬旅行……………164

第二十八章 バラタリア総督サンチョ・パンサ閣下……………169

第二十九章 いたましい政治の末路……………179

第三十章 ドン・キホーテとサンチョ、冒険生活にもどること……………185

第三十一章 銀月の騎士……………193

第三十二章 かなしい帰国……………198

第三十三章 ラ・マンチャの騎士の死……………204

スペイン、ポルトガル民話……………会田 由訳……………209

四人の学生の話……………211

口ぐるまのフワニート……………215

なしの実……………219

おしょうさんのらば……………223

うでのないむすめ……………225

三つの答え……………234

かっこう鳥……………236

イタリヤ民話……………岩崎純孝訳……………249

おそれを知らぬジョバンニ……………251

おおかみと三人のむすめ……………254

ポーモ（実）とスコルツォ（皮）……………257

ベラ・フロンテ……………264

フィレンツェ人……………269

水晶のおんどり……………273

せむしで、びっこで、いつくび……………277

三人のみなしご

279

どろぼうばと

282

プラテールとわたし

ホワン・ラモン・ヒメネス作
永田寛定訳 287

一 プラテール

二 大はしやぎ

三 春

四 いらあい

五 きちがい

六 道ばたの花

七 月かげ

八 カナリヤにげる

九 おどろき

十 とげ

十一 日ぐれのあそび

十二 せすじのさむさ

十三 あの人とわたしたち

十四 けとばし

十五 夏

十六 ねかしつけ

十七 こおろぎ

十八 毛のぬけたいぬ

十九 あらし

二十 かも

二十一 昼さがり

二十二 肺病のむすめ

二十三 歩きまわり

二十四 謝肉祭

二十五 井戸

二十六 夜曲

二十七 荷車

二十八 ひつじ飼

二十九 病後

三十 おさない女の子

三十一 秋

三十二 十月の夕ぐれ

三十三 おうむ

309

307

304

302

300

298

296

294

292

290

289

310

308

305

303

301

299

297

295

293

291

289

310

308

306

303

302

300

298

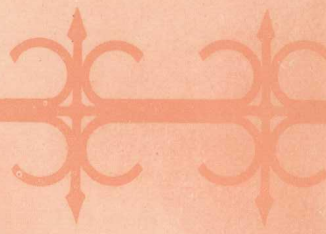
295

293

292

290

三十四	十一月の牧歌……………	311	三十五	カナリヤ死ぬ……………	311	三十六	花火……………	312
三十七	つみのこのぶどう……………	313	三十八	清純な夜……………	314	三十九	夜あけ……………	314
四十	クリスマス……………	315	四十一	冬……………	316	四十二	死……………	316
四十三	木のろば……………	317	四十四	うらがなしき……………	318			
ま								
一	さいしよの旅行……………	321	グラーツィア・テレッタ作					
二	新しい生活……………	331	矢崎源九郎訳					
三	数年たつて……………	339						
四	心のいたで……………	345						
五	人知れぬ犠牲……………	359						
六	新年の晩餐会……………	370						
七	サンジャコモ……………	382						
八	アンナの帰郷……………	388						
九	二つのまごころ……………	396						



読書指導
 解説
 読書指導
 読書指導

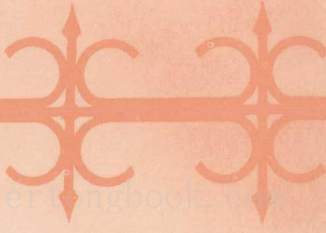
.....

読書指導研究会
 野村純三
 滑川夫
 416

訳者
 408

装
 本
 池田仙三郎

さしえ
 山田三郎
 池田龍雄
 堀内規次
 斎藤長三



ドン・キホーテ

ミゲール・デ・セルバンテス^ま作

杉^ま浦^ら 朗^み 平^べ 訳^り



300年むかしのスペインには、テレビもラジオも
ドン・キホーテ まんがもなかったけれど、騎士物語という本が流行
について していました。その話のなかでは、まほうつかいや
あくまや、おそろしいりゅうもでてくれば、うつく

しい王女さまや、どんなあいてにもまけぬ勇士も登場します。だれもかれも、
現実の人間ではできないような、ふしぎなわざをするのです。それはちよう
ど、赤胴鈴之助とか、快傑ハリマオとか、ブラック・デビルとおなじでした。

ところが、みなさんのような子どもではなく、ちゃんとしたおとなのドン・
キホーテが、そういうでたらめなつくり話を、ほんとうのことだと信じこんで
しまいました。さあ、たいへん。よろい、かぶとに身をかため、やりをもち、
愛馬ロシナンテにまたがって、まほうつかいをやっつけようと、武者修行にで
かけました。おともは、ろばにのったお人よしのサンチョ・パンサです。

このあたまのすこしおかしい主人とけらいのまえに、どんなにこっけいな事
件がもちあがるでしょうか。つぎのページから、ドン・キホーテのゆかいな冒
険が、はじまり、はじまり。

(杉浦明平)

第一章 かわりものの、いなかだんな

むかしむかし、スペインの国のマンチャ県のある小さな村の入り口に、ケサダながし、いや、ひよつとしたら、キハダながしという郷士どのが住んでいました。

この人は五十をこえていたけれど、いなかの自由な生活と健康な空気のおかげで、まだどうどうとして、げんきなからだをたもっていました。といつても、やせつぼちで、足はひよろひよろと長く、手もやはり、かれえだみたいでした。

村の人々は、このだんなを尊敬していました。といつのは、このだんなは人のいいかたでしたし、粗野な村人の生活を指導しても、やりかたが、さつぱりして、こだわりがなかつたからです。平和な自然のなかでくらししていると、こう

いう人物ができるものです。

そうかといつて、このだんなのいっぽうかわつた生活ぶりや話しかたが、すこしでもなくなつたというわけではありませぬ。

角ばつた頭、あごをかざっている、そうとうに長くほそいひげ、するどいけれどやさしい目つき、こういうもののおかげで、このだんなのすがたは、目につきやすかつたのです。こういう特徴がなかつたら、りつばな紳士だといつてよかつたのです。

ケサダのだんなは、先祖からつたわる財産のおかげで、かなりのんびりくらししてきました。その財産は、金持ちといえるほどではありませんが、じぶんひとりだけでなく、わかじめいがひとり、年とつた家政婦ひとり、うまやにうま一頭をりつばにやしなつていけるだけのものはありました。

しかし、この物語のはじまるころには、ようすがびっくりするほどかわつていました。年々収入はへつていくばかりでしたし、田畑も人手にわたるし、家のじまんの品々も土地のブローカーたちの手にうつつてなくなろうとしていました。郷士どのは、へいきで、ばかげたことに先祖からつたわる



財産をむだづかいました。とくに、なによりも、あるいはばんくでないことに熱中して、金をつかつていたのです。

その熱情は少年時代にやみつきとなつたのですが、年をとるにつれて、ほんとうのきちがいきたにかわつてきました。それは、つまり、騎士文学にたいする熱情です。武者修行をする遍歴騎士やふしぎな勇士についてかかれている、本や物語のことでした。

この老人のへやには、本が山のようにつまれていました。ありとあらゆる色と形の本の山です。その本の山のあいだにすわつて、わが郷士どのは、まいにちまいにちをすごしました。むちゆうで何百ページをむさぼりよみ、その読書のおかげで、うれしくてたまらなくなるのでした。そのあげく、あたまのなかにのこるものは、決闘や、むごたらしい冒険や、りゆうやばけものとのたたかいかいや、天使のような貴婦人の人さらいなどだけでした。

このだんなのますしいのうみそは、騎士の世界のめまぐるしくかわる事件や、まったくこの世にありそうにない人物の愛とにくしみや、巨人だのなんだのという、子どものおとぎ話くさいものにたいするおそろしい戦いの話をしよつちゆう

くりかえしてよんでいるうちに、でんぐりがえってしまったのです。

こうなると、このだんなさんのせわをみる家政婦たちは、一瞬間もおちついてはいられません。しずかな夜中に、だんなのわめき声や、ののしるさげびをきいて、かけつけねばならなかったのです。というのは、だんなは、なにか空想上の敵にむかって、かみなりのような声でどなりつけるからです。

ご主人のへやにかけつけると、やせほそつただんなは、ベッドの上につつ立って、あせびつしより、ふらふらになつて、大きなサーベルをあらあらしくふりまわしているのです。人々は、このだんなを正気にもどらせるために、何時間も何時間も苦心することが多かつたのです。

だんなは、まほうつかいや城主のことをくちばしり、きつねつきみたいにいへやじゅうをかけまわりながら、刀でかべをドシンドシンぶんなくつては、その場にもしれない人物の名をさげぶのでした。だんなは、そういう人物が、あるときはここに、あるときはかしこにいるのが見えるとがんばりました。

人のいい女中たちは、とほうにくれて、いろいろな手をつかつて、やっとご主人をなだめて、ベッドにねかしつけました。それでだんなは、あんまりこうふんしすぎたために、またおそろしいあくまのいっばいでくるゆめを見るのでした。

この人のいちばんなかのいい友人、たとえば、とこ屋のニコラスとか、村の牧師ドン・ペーロ・ペレスとか、みんな手のつけようもないのんきものぞろいでしたが、ケサダのめいのたのみに心をうごかされて、まじめにこのだんなのことをしんばいしていました。けれども、いったいどういうかんがえがこの郷士どの中いっばいにそだつて、すっかり正気をうしなわせてしまったのか、さっぱり想像もつきません。

じっさい、こういう問題に、そのまずしいあたまをつつこんでいるうちに、このだんなは、およそばかげたことを決心することにりました。

つまり、おれも遍歴騎士になつて、やりと刀をたずさえて、うまにまたがり、おどろくべき冒険をさがしとめ、悪人ばらをこらしめ、わるいまほうつかいの手から女性をとりもどしながら、スペインじゅうをかけまわろうというわけで

す。

つまり、どんな苦勞にもまげず、勇氣をふるって、冒險にうちこんで、偉大な、すばらしい計画をなしとげよう。そのけっか、ひよっとしたら王国を一つぐらい手にいれ、最高の榮譽にたつすることになるかもしれない。全人類がおれのことを知り、おれのでがらは口から口へつたわって、だいたんさと心のひろさにかけてはくらべものない人物として、父から子へとかたりつたえられるかもしれない。

すぐに、このだんなは、ひそかに出発の用意にとりかかりました。

まず、天じょううらからとりだしたのは、いつかわからぬむかしからほうりこんであつた、赤さびたよろいでした。

だんなは、めしつかいたちがあきれかえつてながめているなかで、その武器のありとあらゆる部分をぴかぴか光らせるために、いっしょうけんめいにはたらきました。めしつかいたちには、どうしてご主人がこんなにせいだすのか、そのわけがのみこめませんでした。すつかりさびをすりおとし、油のついたぼろでよくこすると、板金もむねあても胴着も、ぴかぴか光るようになりしました。

だんなは一つ一つの道具のまえに立ちあがつて、よろこびにかがやくまなざしで、すみのすみまでよくながめるのでした。とほうもなく大きな刀の刃をときなおし、たてや拍車や帯ややりのまわりを一ばんじゅうあるきまわつてすごし、もういっさいの用意ができあがつたとよろこんだとき、とつぜん、だいじなものが一つたりないことに気がつきました。かぶとのことです。

気がくるいそうでした。ちくしやう、ちくしやう、と、だれもないあいてをのしりながら、四方八方を見まわしますと、とうとう鉄かぶとが一つでてきました。もつとも、ヘルメットも、はねかざりも、あごたれもなかったのですが。

しかし、だんなさんは勇氣をうしないません。こんきよくボール紙でヘルメットをこしらえ、布ぎれであごたれをつくり、かぶとのでつぺんには、にわとりからぬいてきたはねを二本さしこみました。そういうものはみんな、ふといなわと、むすびめだらけのひもとで、ごちゃごちゃにしばりあわせてあつたのです。

そのあとで、だんなは、かぶとのがんじょうさを実験してみたくになりました。刀をしつかとにぎつて、テーブルのまん